

# 教化センター通信 ダルマアピール

発行  
真宗大谷派三条教区  
教化センター  
三条市本町2-1-57

## 「キーパーソン曇鸞」

教化センター主幹 里村専精

親鸞の七祖が語るどころ、三国の仏道の歴史です。その鍵を握る人が曇鸞大師です。曇鸞の回心が捉えたインドの二祖は、本願の仏道の歴史に生きました。曇鸞の眼を通さないと、二人は別々の聖者として孤立してしまいます。

論註の冒頭、曇鸞は二師を一貫する不退転を尋ねます。凡夫往生が、正定聚であり不退転だと曇鸞は言います。

凡夫往生というと、次元の低い仏道のように思う人が多いのではないのでしょうか。しかるに曇鸞は、巨大な仏道を言い当てていました。

優れた人々を救う仏道は、あつても狭いものですが、凡夫を救う仏道こそ一切の人類を包んだ仏道です。優れた龍樹も天親も、こういう無量寿経の仏道によってこそ救われたのです。

それが念仏往生の道であり、本願の仏道でした。こういう曇鸞を知る人と知らない人では、仏道全体が違ってきます。実に親鸞は、玄中寺の三人だけを七祖に撰びました。優れた有名な中国の仏者を全部捨てているのです。

「焚焼仙経帰楽邦」といいますが、曇鸞はその回心において漢民族という狭さをも脱却していたのです。焚焼したのは、曇鸞の人間性を狭く制限することだと言いましょ。

その曇鸞が住み、やがて道綽が驚いた玄中寺。この寺に、他に見られない生きた念仏のサンガがあつ

たのです。道綽は言います「先に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪らえ。連続無窮にして、願わくは休止せざらしめん欲す。無辺の生死界を尽くさんがためなり」と。

こういふ道綽の見た仏道に育てられただ唯一人の人が善導です。玄中寺の三人の仏道以外は、果たして人類に開かれた仏道と言えるのでしょうか。

漢民族の理解した限りの仏教が、今も中国や日本を覆っているのではないのでしょうか。優れているかのように見えるエリート仏教ではなく、凡夫往生と開かれた偉大な仏道は、七祖によって確認されたものです。

その鍵は、曇鸞の回心に基づくものです。曇鸞を知らない中国仏教は、基本的には道教なのではないでしょうか。数の多いことではありますが、決して人類に開かれた仏道ではないと思われることです。

キーパーソン曇鸞、その人の回心の意義を確実に見つけたいものです。

## 「御遠忌がスタートライン」

第十二組 浄照寺 小林智光(八期生)

初めて三条別院の印刷物に筆を取らせて頂きました。十二組・浄照寺の小林智光と申します。

今回、ダルマアピールの原稿を書くにあたり、テーマの設定にとても悩みました。時期的なことをいえばやはり御遠忌のことが最適なのですが、私自身は昨年の四月から寺に入ったばかりですので、御遠忌をテーマにするほどの知識もなければ経験もありません。ましてや教区の多くの方が目にされる印刷物の原稿となるとますます筆が進みませんでした。

一方で組や教区のお待ち受け法要の準備を各寺院の方々やご門徒の方々と力を合わせて進め、また、肅々たる空気感の中で出仕するうちに、少しずつで

はありますが自分の中でテーマが定まってきました。改めて私の今回の原稿のテーマは「御遠忌がスタートライン」にしたいと思えます。

前述の通り、私は昨年の四月より寺に入り法務に就いております。それまではとある中小企業で営業をしております。営業は実績を上げて利益を生み出すのが職務ですので、徹底した「市場原理」を叩き込まれました。ですので、環境も立ち位置も違う寺に入ってから不慣れな上にわからないことが山積みの日々であります。

本来の立ち位置からすれば、寺は聞法(講)であり、損得勘定で動いてはならないと思えます。しかし、住職をはじめ、寺族にとつて寺は「生業」の場であることも事実です。その為、法務や様々な活動が一方に偏ってしまったり、「どっちつかず」になつてしまうこともあるのではないのでしょうか。

そこで、「寺は「聞法」の場か「生業(なりわい)」の場か」について考えてみました。

寺院を「生業の場」と割り切り、そればかり追うような姿勢ではいずれ社会的制裁を受けましよう。しかし、「聞法」だけに偏つてしまつと、「百年に一度」とまで言われるこの社会情勢では「生業」が成立しません。寺というのは本当に難しいものであると感じます。

少し意味合いは異なりますが、夏目漱石の小説『草枕』の冒頭に

智(ち)に働けば角(かど)が立つ。情に棹(さ)おさせば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

という一文があります。何事もやはり「バランス」が大切であり、何か一方に偏つてしまわないように常に自身を見つめ続けていく力を養いたいものです。この度の御遠忌が私の僧侶一年目と重なったことは私の中で大きな意味を持っています。

そして、前述したような厳しい時代と課題を考えれば、この度の御遠忌は私だけでなく宗門自体にとつても一つのスタートラインであるといえるのではないのでしょうか。

## 「聞不具足」

第十八組 西源寺 楠 無量(五期生)

お待ち受け法要も無事?(人それぞれだと思えますので...) 厳修され、さらに来年の御遠忌団参等の準備等で皆様お疲れの事と感じておりますが、来年末まで頑張りましょうね。

さて、「いのち皆、生きらるべし」というリルケという人の言葉がございます。大谷専修学院に縁ある方なら耳に残つておる言葉たとおもいます。

児玉暁洋先生の「生と死と無量寿 根本分裂の克服」に、リルケの

「誰ひとり自分の生を生きていない」

「人々は偶然にすぎません。ただ声であり、破片であり、日常であり、不安であり、多くのさやかな幸福であるに過ぎません。子供のころからもうすつぱりと仮装され、仮面として成人となり顔などは 消えているのです。」

という言葉を紹介され、その生活を

「自分の内面に一貫性を持たないままその時その場所に役立つものとして役割をこなすという仕方

で生きる。そこがまた次の仮面とつながってくる。(略)つまり自分として生きることができない。

なにか価値を持った人間として生きなければいけない。(略)他人から評価されなければならぬ。(略)自分として生きるのではなく、価値という仮面で生きなければならぬ。つまり役割を上手にこなさなければならぬ。」

と言いつちられております。このリルケと児玉先生の言葉は当に、私自身の姿、正体、業の深さを言い当て、思い知らせて頂く重たい言葉でした。

そして、「いのち皆、生きらるべし」の言葉を撰取不捨と押さえておられます。如来(神)からの我々への呼びかけ、願い(勅命)ですね。それを私が生活の中で「生きていますよ」と明快に如来に手を合わせる生活が始まるか否かということがこちら側の責任であるんだと...

リルケによれば世に一つの奇蹟(奇跡)であるというし、無上甚深微妙の法は百万劫にも遭遇すること難しと仏教ではいふ。そんな時、故・竹中先生の「浄土を荘厳していく生活をしていこう」と仰る姿を思い出しました。

一生迷い続けるがゆえに、そこに仏の神の声というのは常に働くのでした。勿体ないことでした。年末、年始と別院に行く機会がありますので誰か、ゆつくり一杯やりながら語りたいですね。



## 「じよとば」について

第十七組 称名寺 有坂次郎(八期生)

県人が韓国ツアーで料理店へ行き、注文したがなかなか運ばれて来ないので、「アンニヤ・ハヨセヨ」と店員に言うたら、すぐに石焼ヒンパが出てきた。... という眉唾もののジョークがあります。しかしこのジョークは「ことば」というものの本質を良く表しています。「ことば」には本来、意味がないという事実です。店員は料理の提供が遅れていることと、県人の怒ったような物言いから察して「兄ちゃん!速く持って来い」という「意味」を理解したの

です。

発声される音の連なり「ことば」は、話し手の伝えようとするとイメージと、聞く側のイメージが同じくなるようにと、人類が長年知恵を重ねて創りあげてきた成果です。もうひとつ言えば、人間の基礎的な思考は「ことば」によるものではありません。「ことば」以前に「イメージ」が生起するのです。「イメージ」を「ことば」に変換しているのです。生まれつき目が見えず、耳の聞こえないヘレン・ケラーは家庭教師が手のひらに書く指文字から、自分の意思を伝える方法。「ことば」の存在を確信した... と伝記にあります。このことから、彼女は「ことば」を持つ以前から「思考」していたということが解ります。

話し手の「ことば」を理解しようとする時、私たちは必ず頭の中で、話し手の「ことば」を復唱しています。復唱こそ「聞くという行為」です。一、話し手が話したいことをイメージする。二、イメージを「ことば」に変換する。三、音声として発する。四、聞き手は復唱する。五、復唱された「ことば」から変換してイメージを「自分なりに創り」出す。六、それが聞き手の理解となる。というのが「ことば」による意思伝達の順序です。ですから、話し手のイメージが聞き手のイメージと全く同じであることは「全く無い」のです。互いのイメージの一部を共有することを「相互理解」とか「解った」と私たちは呼んでいるのです。

何を言いたいかというと、釈尊は、「覚りのイメージ全体」を「ことば」に変換することは出来ず、また、聞き手が釈尊の「ことば」を「覚りのイメージ全体」に変換できないことを知っておられたということなのです。

釈尊の覚りを感じ、説法を「勧請」した梵天は、仏教史の脇役ではない... と思います。